



きらつと教育

3回シリーズで、「児童養護施設における予防教育法の観点からのアウトドア考察」を紹介いたします。

ドン・ボスコの提唱した予防教育法の観点から考察すると、アウトドアは、「グラウンド・コミュニケーション」に相当する。教室では、教壇から生徒に接し、教師は生徒の上に位置しているが、グラウンドでは両者は同位置にあり、親密な交わりが可能となる。

結論から言うと、予防教育法によるアウトドアは、先生と子どもたちとの信頼関係を築くための重要な一方法と言えよう。

ドン・ボスコの言葉から、私なりにサレジオ会的なアウトドアを考えてみたいと思う。

その2:「愛するだけでは足りません、愛されていることを感じさせるものでなければなりません」

ドン・ボスコは私たち教育者に非常に厳しい要求をしている。

私たちが、貧しく放任されている子どもたちのために一生懸命働くだけでは十分ではなく、「自分たちは愛されている」と子どもたち自身が感じ取れるほどまでに尽くすことが求められている。

私たちが「こんなに愛しているのに、こんなに尽くしているのに、こんなに苦労しているのに、」と思っても、子どもたちとの信頼関係を結べるようになるため、大人的人格形成も問われていることを自覚することも必要である。

アウトドアは、この愛されていることを感じさせるための絶好のチャンスである。大自然の中で、すべての行動を共にしていくうちに、子どもたちは同伴する大人たちに心を開いていく。

児童養護施設のこどもたちは、基本的に大人（親）に対して信頼感を抱いていないので、こういった機会に「大人はみんな悪い人ではないんだ」と子どもたちから思われることが、信頼関係を生み出していく第一歩だと思う。

(シスターS.K.)